

使徒言行録 2 章 1-11 節 「50 日目のこの日」

キリスト教会の三大祝祭日とは、クリスマス、イースター、そしてペンテコステです。ペンテコステとは、簡単に言うと世界で初めてキリスト教会が誕生、創立した日です。エルサレムで、120名ばかりの人々が集まって、初代キリスト教会が誕生、スタートしました。ペンテコステという言葉の意味は、ギリシア語で、50日目という意味です。主イエスの復活された日曜日から50日目。では、そのペンテコステの出来事が、今の私たちにどうかかわっているのか、聖書から見ていきましょう。

聖霊降臨は、突然やってきました。実は、すでに 1 章で描かれた「心を合わせて熱心に祈っていた(1:14)」のです。そして本日の御言葉では、「一同が一つになって集まっている」、とこのように展開して、ペンテコステにつながります。信仰者が一つに集まっていて、心を合わせて熱心に祈る群れ。それは、すなわち教会です。聖霊は、教会に注がれる、これがこのペンテコステの最初の記事がまず示す真理なのです。

2 節の「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」をギリシア語本文で読む限り、家中に「激しい風」が満ち溢れた、という状況が描かれています。この「激しい風」とは、使徒言行録 17:25 で「命と息」と訳されています。また、ギリシア語の旧約聖書(70 人訳聖書)では、「その鼻に命の息を吹き入れられた(創世記 2:7)」と同じ言葉が使われています。この「激しい風」は、神の命の息であって、それが家中に、すなわち、やがて教会となる場所に満ち溢れます。人間を創造され命を与えた神の息は、同じように今教会に満ち溢れ、教会に命を与えた、つまり、ここでは、教会の誕生という歴史的な大事件が暗示されているわけです。そして 3 節での「分かれ分かれに現れた」という言葉は、聖餐式でも用いられています。「これを取り、互いに分けて飲みなさい。(ルカ 22:17)」と。つまり「炎のような舌が分かれ分かれに現れ」、と御言葉が伝えている時、教会はその最初から、分かち合う共同体であることが示されているのです。そして「一人一人の上にとどまった」とは、まるで、再臨のキリストが、「栄光の座に着く」かのように、「炎のような舌」が、信仰者「一人一人の上」に着座した、そう言う状況なのです。

これらのことから、ペンテコステの出来事について、2 つのことを確認します。一つは、人々が望もうが、望むまいが、全ての者が、福音を語るしかなかった、しかも“霊”が語らせるままに語るしかなかった、これが大切なのです。上手い下手はどうでもいい。「“霊”が語らせるままに」すなわち、御言葉に導かれたあなたの言葉でキリストを証するのです。もう一つは、教会は神の言葉で生まれ、そしてその最初からこの世に対して開かれていた、という事実です。私たちは、今、神の御言葉をこの会堂に閉じ込めて聞いているのではなくて、今いただいたこの神の言葉を、私たちは教会の外に出かけて行って、一人でも多くの方に宣べ伝えなさい、と伝えられています。聖霊は目に見えません。ですが、50 日目のこの時に弟子たちが経験したように、私たちも聖霊の導くまま、神の御言葉を心にとめ、一人でも多くの方と祈る集まりでありたいと願います。